

# 豊かな心をはぐくむ家庭教育の支援

## 家庭教育支援系の設置による学校ぐるみの支援の在り方

指導主事 山岡 祥高

Yamaoka Yoshitaka

### 要 旨

子どもに豊かな心をはぐくむためには、家庭の教育力向上が求められる。そのためには、学校からの家庭教育支援が必要である。そこで、校務分掌に家庭教育支援係を設けることを想定し、この係を中心にした様々な家庭教育の支援の在り方を考察した。

キーワード： 豊かな心、家庭教育、家庭教育支援係

#### 1 はじめに

家庭教育は、すべての教育の出発点であり、この教育によって子どもは生きるための基本的な資質や能力を養い、人格を形成していく。しかし、近年、家庭の教育力の低下が指摘されている。そこで、このように指摘される原因を探る。また、子どもの実態や親・教員の意識を分析し、豊かな心をはぐくむために家庭教育に求められているものを探る。それらから、学校からの家庭教育の支援の在り方を考えていく。

#### 2 研究目的

子どもに豊かな心をはぐくむために、学校からの家庭教育支援の在り方を考察する。

#### 3 研究方法

- (1) 「豊かな心」とは
- (2) 家族形態と家庭教育の変遷の分析
- (3) 家庭教育に関する県教育委員会のアンケート結果の分析
- (4) 豊かな心をはぐくむために求められる学校からの家庭教育支援の在り方の考察

#### 4 研究内容

- (1) 「豊かな心」とは

小学校学習指導要領の「道徳」を基に、豊かな心とはどのような心かを探った。

まず、主として自分自身に関することとしては、正直な心、過ちを素直に改める心、善悪を区別し善を行う心、自己実現を目指す心などがあげられる。主として他の人とのかかわりに関することでは、思いやりや親切にする心、真心をもって接する心、感謝する心、友達を理解し信頼し助け合う心、謙虚な心などがあげられる。主として自然や崇高なものとのかかわりに関することでは、自然のすばらしさや不思議さに感動する心、生命の尊さを感じ大切にすることなどがあげられる。主として集団や社会とのかかわりに関することでは、公共物を大切にすること、約束を守る心、家族が協

かし合っ楽しい家庭をつくろうとする心、郷土の文化と伝統を大切にす心、誰に対しても差別することや偏見をもつことなく、公平・公正に、正義の実現に努める心などがあげられる。

このような内容からすれば、豊かな心とは子どもの年齢に関係なくはぐくむべきものであり、まさに家庭で子どもに教育すべきことそのものであると言える。しかし、近年、家庭の教育力の低下が指摘される。そこで、まず、なぜ家庭の教育力が低下したのかを、家族形態と家庭教育の変遷から考えていく。また、子どもの実態調査や親・教員の意識調査などから、家庭教育の現状等を分析していく。

## (2) 家族形態と家庭教育の変遷

元来、日本は農耕文化の中で「家族・家庭」というまとまりがすべての生活の基になっていた。しかし、戦後、急速な経済発展とともに社会も大きく変化した。その変化の中で、家族形態や家庭教育の在り方も大きく変化した。

農村を例にとると、昭和 29 年に最初の集団就職列車が走り始め、農村の若者が都会の労働力として村を離れるようになった。また、そのころから日本の高度経済成長が始まったこと、農作業の機械化が急速に進み農業に多くの労働力を必要としなくなったことなどから、農業従事者の多くが企業に就職するようになった。また、子どもの農作業の手伝いも農業の機械化とともに不要になっていった。こうして次第に家庭は「労働の場」から「消費の場」へと移っていった。そのため、これまで労働を通して祖父母や親から自然な形で子どもに伝えられてきた様々な「人としての教育」がなされなくなった。また、機械化がそれまで協力して農作業を行っていた「結い」と呼ばれる村のまとまりをも不要なものにした。こうして、農村における人々のつながりはしだいに希薄になっていった。

一方、子どもの遊びも、少子化やテレビ・コンピュータゲームの普及などによって大きく変化した。それまで、空き地などで異年齢集団をつくり群れて遊んでいた子どもは、次第に家庭で過ごすようになった。そのため、集団による遊びの中から様々な体験をしたり、人とのコミュニケーション能力を身に付けたりすることができなくなった。

子どもに対する価値観も変化してきた。古来より、子どもは「神からの授かりもの」と考えられてきたが、現在、子どもは経済力や子どもに費やす時間などを考えながら「親がつくるもの」になった。こうしてつくられた子どもは親の「所有物」であり、親の中には自身の自己実現の手段として、子どもの学力の伸長や習い事に力を注ぐような姿も見られるようになった。

また、核家族化が進んだことや地域とのつながりが希薄になったことにより、実生活において、乳幼児に接する機会のないまま大人になり、子どもへの接し方や教育の仕方が分からない親も増加してきた。さらに、現在の親には、全面的にわが子の「子育て」を抱えこみ、責任の重さに閉塞感に陥ったり、ストレスを溜めたりしながら子育てをしているような姿も見られる。

このように、家庭の役割の変化、地域のつながりの変化、遊びの変化、子どもに対する価値観の変化などにより、本来、家庭や地域において自然な形で行われてきた豊かな心をはぐくむための様々な教育を意識的に行わなければならない状況になってきたと言える。

## (3) アンケート調査結果からの考察

県教育委員会では、県内の家庭教育の実態把握と子育て支援の方途を探るため、平成 12 年度は保育所（園）児・幼稚園児・小学生の親を対象に、平成 13 年度は保育所（園）・幼稚園・小学校の教員を対象に、平成 14 年度は小学 5 年生と中学 2 年生の子どもを対象に家庭教育アンケート調査（以下「家庭教育調査」と略）を実施した。この 3 年間の調査を基に、子どもの実態や親・教員の

意識から家庭教育の現状を分析し、豊かな心をはぐくむ方途を探っていくことにする。

表1は、教員に「『ありがとう』『ごめんなさい』が言える」「良い悪いの判断ができる」「友達を思いやる」などの豊かな心に関する項目について、「主に家庭で身に付けさせるべきであると思うか」と尋ねた調査結果である。このことから、非常に多くの教員が、これらのことを身に付けることは、主に家庭の役割であると考えていることが分かる。

表1 平成13年度家庭教育調査(保育所、幼稚園、小学校の教員)

	家庭で身に付けさせるべきだととも思う、まあまあ思う(%)	家庭で身に付けさせるべきだとまったく思わない、あまり思わない(%)
「ありがとう」「ごめんなさい」が言える	97.8	1.4
良い悪いの判断ができる	96.1	3.0
友達を思いやる	84.5	14.4

表2は、小学5年生に「保育所や幼稚園のころから今までに次のようなことをしたことがあるか」という体験の有無を尋ねた調査結果である。このことから、「植物の世話をする」「昆虫をつかまえる」「夜空の星を見る」といった簡単にできる体験であっても「していない」と答えている子どもが多く、子どもに体験が不足していることが分かる。子どもはこのような様々な体験を通して、「生命の尊さを感じ大切に作る心」や「自然のすばらしさや不思議さに感動する心」などを学ぶ。これらの学びは、すべて豊かな心をはぐくむことにつながるにもかかわらず、家庭であまり行われていないという現状が分かる。

表2 平成14年度家庭教育調査(小学5年生)

	よくある、ときどきある(%)	あまりない、まったくない(%)
植物の世話をする	57.7	41.7
昆虫をつかまえる	46.6	53.0
夜空の星を見る	56.1	43.7

表3は、小学5年生に「家で自由な時間があるとき、どのようにして過ごすか」を尋ねたものである。この結果から、友達と過ごすより一人で過ごしている子どもの方が多いことが分かる。子どもは友達とのふれ合いを通して「思いやりや親切にする心」や「友達を理解し信頼し助け合う心」などの豊かな心をはぐくんでいくが、この結果から子どもの豊かな心の育ちに影響が及ぶことが懸念される。

表3 平成14年度家庭教育調査(小学5年生)

	家で自由な時間があるとき、どのようにして過ごすか(%)
一人で過ごす	55.1
友達と過ごす	39.2

表4は、親に「手伝いを積極的にさせているかどうか」を尋ねたものである。手伝いをさせることは、責任感や自主性を育てるとともに、思いやりの心や家族の一員としての自覚をはぐくむことにもなるため、豊かな心をはぐくむ家庭教育において大切にすべきものである。それにもかかわらず、「手伝いをさせていない」と答えている親が33.3%もいることが分かる。

表4 平成12年度家庭教育調査(保育所児、幼稚園児、小学生の親)

	手伝いについて(%)
手伝いを積極的にさせている、まあまあさせている	66.7
手伝いを積極的にさせていない、あまりさせていない	33.3

表5は、親に「子育ては楽しいか」と尋ねた結果と「相談できる人がいるか」「学校・園や地域の行事に参加しているか」を尋ねた結果とをクロス分析したものである。子育てを楽しくないと感じている親ほど、相談できる人があまりいなかったり、学校・園や地域の行事にあまり参加していなかったりしていることが分かる。子育てをする中で親は様々なストレスを感じるが、子育てを楽しく感じることで、子どもに豊かな心をはぐくむことができる。そこで、学校・園は親に対して学校・園や地域の行

表5 平成12年度家庭教育調査(保育所児、幼稚園児、小学生の親)

	子育てについて相談できる人はあまりいない、まったくいない(%)	学校・園の行事に参加していない、あまり参加していない(%)	地域の行事に参加していない、あまり参加していない(%)
子育ては楽しい、まあまあ楽しい	11	8	30
子育ては楽しくない、あまり楽しくない	30	21	51

表6 平成13年度家庭教育調査(保育所、幼稚園、小学校の教員)

	まあまあそう思う、とても思う(%)
教員からの親に対するアドバイスは、子どものすこやかな成長に役立つ	94.7
学校での子どもの様子を親に知らせることは有意義である	97.5
家での子どもの様子について、親から話を聞くことは有意義である	97.7
学級懇談会・面談等の充実を図ることは、家庭教育の支援に役立つ	93.0
学級だよりなどの配布物は、家庭教育の支援に役立つ	88.0
地域の諸団体と連携することは、家庭教育の支援に役立つ	85.7
家庭教育についての職員研修の充実は、家庭教育の支援に役立つ	82.7

事に積極的に参加するように働きかけていくことも大切である。

表6は、教員に家庭教育の支援に関して尋ねた結果である。多くの教員は、教員からのアドバイスや家庭との情報交換や懇談会などの充実を図ることが家庭教育の支援につながると考えている。また、配布物の充実、地域の諸団体との連携、研修会の充実などが家庭教育の支援に役立つと考えている。そこで、教員と親との情報交換の機会を多くもったり、配布物の充実、家庭教育の研修の充実、地域との連携の推進などを努めたりすることが大切であり、このようなことをより積極的に行うことが子どもに豊かな心をはぐくむ支援になると言える。

(4) 豊かな心をはぐくむための学校からの家庭教育支援の在り方

「家族形態と家庭教育の変遷」や「家庭教育調査」の結果から、子どもに豊かな心をはぐくむためには、現在の家庭教育に不足していることを補うことが大切であることが分かる。また、学校からの家庭教育支援の必要性は多くの教員が認識している。この支援は各担任が個々に行うことに加え、校内の全教職員による共通理解の下、同じ姿勢で全校の親に対して行うことがより効果的である。そこで、校務分掌に家庭教育支援係を設け、この係を中心に、様々な家庭教育支援に取り組む体制をつくるのが望ましいと考える。以下に、この家庭教育支援係の主な役割をまとめる。

ア 家庭教育支援の目標や重点の作成

家庭教育支援の目標と各月の支援の重点を作成し、計画的に支援を行っていく。表7は、目標を「豊かな心をはぐくむための家庭教育支援をめざす」としたときの、各月の支援の重点をまとめたものである。各月の支援の重点には、基本的生活習慣に関すること、しつけに関すること、体験

表7 月ごとの家庭教育支援の重点

	家庭教育支援の重点
4月	家庭での会話を大切に
5月	基本的生活習慣を身に付けさせる
6月	規則正しい生活をさせる
7月	学校や地域の行事に積極的に参加する
8月	様々な体験をさせる
9月	しつけを考える
10月	読書をさせる
11月	自由時間の使い方を考えさせる
12月	お手伝いをさせる
1月	コミュニケーション能力を高める
2月	善悪の判断力を付けさせる
3月	一年間の成長を認める

表8 重点に基づき懇談会などで話し合いをする内容

4月	新しい学級・友達・先生のことを聞いてあげよう
5月	基本的生活習慣は付いていますか - 根気よく、繰り返しましょう・「おはよう」「おやすみ」のあいさつは、できていますか
6月	規則正しい生活リズムを付けよう
7月	お父さん、お母さん、学校や地域の行事に積極的に参加していますか
8月	体験をさせよう - 子どもは体験から様々なことを学びます -
9月	ほめる、しかるはしつけのポイントです 努力を認めて、まずほめてあげましょう
10月	読書の秋 - 家族で本を読みましょう・ テレビを見ないで過ごす日をつくってみませんか
11月	遊ばせていますか - 子どもは遊びの中から様々なことを学びます -
12月	手伝いをさせていますか - 一人一役を与えましょう -
1月	同学年や異学年の子どもと交流をさせてあげよう
2月	どうすればいいかな? - 2月の授業参観は、全学級、道徳です・ 言っていないから? - 男の子なんだから 女の子なんだから -
3月	1年間の成長を認めてあげよう

に関すること、家族の会話に関すること、自由時間の使い方に関することなど、家庭に啓発しなければならぬことを分かりやすい項目にしてまとめた。また、表8は、この支援の重点に基づき、学級懇談会

表9 家庭教育啓発文章

<p>新しい学級・友達・先生のことを聞いてあげよう。 (4月) 子どもは、新しい学級になって、不安な気持ちを持ちながらも、いきいきと過ごしています。そのような学校での様子を家庭でじっくり聞いてあげてください。きっと、たくさん話をするはずですよ。その中で、がんばっている点は認めてあげるとともにほめてあげてください。また、不安に思っている点があれば、お父さんやお母さんから助言をしてあげてください。 親が答えを先取りしないで、じっくり子どもの言葉で話をさせてあげてください。そして、その話にじっくりと耳を傾けてあげてください。そのことが、子どものやる気と自信につながります。</p>	<p>体験をさせよう - 子どもは体験から様々なことを学びます - (8月) 子どもは様々な体験を通して、「生活の知恵」や「活動の喜び」や「人のコミュニケーション」などを学びます。しかし、最近は少子化や遊びの変化などによって体験活動が少なくなってきました。 奈良県教育委員会が小学5年生に、保育所や幼稚園のころから今までに「ナイフや包丁でくだもの皮をむいたことがあるか」と尋ねたところ、「あまりない」「まったくない」と答えた子どもが46.5%もいました。また「夜空の星を見たことがあるか」と尋ねたところ、「あまりない」「まったくない」と答えた子どもが43.7%もいました。この結果からも、子どもの体験不足が分かります。 ぜひ、子どもの体験不足を補うために、親や周りの大人が意識的に様々なことに挑戦させて、体験を増やしてあげてください。</p>	<p>手伝いをさせていますか - 一人一役を与えましょう。そして認めてあげましょう - (12月) お風呂を洗う、洗濯物をたたむ、食事の後片付けをする、草花に水をやるなど、家庭でできるお手伝いにはいろいろあります。そんな手伝いを、少なくとも一つは与えて、させてあげてください。簡単な、やりやすい手伝いで結構です。そして、与えた手伝いは継続させてください。 手伝いをすることで、生活体験が豊かになるとともに責任感や自主性が育ちます。また、家族の一員として役に立っているという気持ちをはぐくむことにもなります。なお、励ましたり、ほめたり、感謝の気持ちを伝えたりすることも忘れずに。</p>
--	---	--

などで話し合いをする内容をまとめたものである。また、その話し合いのまとめを「(仮称)家庭教育だより」を通じて親に知らせていくことによって、より一層の家庭教育支援につながる。

また、この項目に基づき、家庭教育支援係が中心になって、表9のような家庭教育の啓発の文章を作成し、これも「家庭教育だより」(前出)を通して全校の親に紹介していく。

#### イ より緊密な家庭と学校の情報交換の体制づくり

学校と家庭が情報交換を繰り返しながら、共に同じ姿勢で子どもの教育にあたるのが豊かな心をはぐくむことにつながる。様々な情報交換の方法があるが、担任を中心にして全校の親と結びつくような体制づくりを家庭教育支援係が中心になって行う。例えば、小学校ではすべての担任と親が毎日、連絡帳に一言ずつ子どもの様子を記入し合って情報交換を行うということも考えられる。また、中学校では担任が必ず月に一度は、すべての親と直接会ったり、電話で話をしたり、手紙などで連絡を取り合ったりするというようなことも考えられる。多忙な日々の教育活動であるが、そのような中で、担任からの情報発信が親の気持ちを変え、担任と親をつなぐ有効な方法となる。様々な情報交換の方法を出し合い、共通理解の上で全教職員が取り組んでいけるような体制づくりを行う。

#### ウ 学校や地域で行われる様々な親子の活動の情報発信

子どもにより多くの体験をさせるために、学校や地域で行われる様々な活動の情報を集め、それらを「家庭教育だより」(前出)で各家庭に発信していく。

各地域では様々な活動が行われている。例えば、親子の体験活動を支援するための事業を主催している公民館もあるし、「おはなし会」を定期的に開催している図書館もある。県教育委員会でも、10月に世界遺産を巡る「家族ふれあいウォーク」を開催したり、県立青少年野外活動センターで親子対象のキャンプを実施したりしている。子どもにとって体験することは重要であることを啓発するとともに、いつ・どこで・どのような活動が実施されるのかといった情報を発信することが、子どもの体験の機会を増やすことになる。そして、子どもは体験を通して、人とのつながり、自然とのふれあい、自らやり遂げようとする力などをはぐくんでいく。また、家庭教育調査結果からも分かるように、親がこのような地域の行事に参加することが、子育てを楽しく感じることもつながっていく。

#### エ 家庭教育講演会の開催

親と地域住民を対象にした、家庭教育に関する講演会を開催する。「なぜ、今、家庭教育が大切なのか」「めまぐるしく移り変わる社会の中で、子どもを健やかにはぐくむには家庭教育はどうあるべきか」「子育てに悩む親は、どのようにしてストレスと付き合っていけばよいのか」など、子どもに豊かな心をはぐくむための親への講演会のテーマには様々なものが考えられる。奈良県教育委員会では、平成16年度は67名の教育関係者等に家庭教育支援講師を委嘱している。それらの講師の講演分野は多岐にわたっているため、各校の親の実態に合わせて講師を選ぶことができる。家庭教育支援係では、この講演会の企画や運営とともに、講演会の目的や講演の要旨を分かりやすくまとめ、家庭教育支援係から「家庭教育だより」(前出)として発行したり、学級や学年のたよりに掲載したりするなどして全校の親に知らせていく。

#### オ 家庭教育に関するアンケートの実施

子どもや親の家庭教育に関する実態や意識を年に一度調査するとともに、子どもや親にその調査結果を返していく。家庭教育支援係が中心になり、アンケート項目を考えたり、集計を行ったり、結果から今後の支援の在り方を考察し教職員で検討し共通認識をもつ。アンケート項目としては、

基本的な生活習慣に関すること、しつけに関すること、家庭での生活に関すること、体験に関することなどがある。同じ項目について毎年調査することによって、それぞれの学校の親が抱える家庭教育の問題点を浮き彫りにすることができる。また、学校からの家庭教育の支援が効果的に行われているかどうかを評価できるとともに、今後の支援の在り方を探ることができる。また、調査項目を県教育委員会や全国レベルで実施した家庭教育調査と同じものにするによって、県や全国との違いなどが把握でき、より学校の現状に応じた家庭教育支援を行うことができる。

#### カ 家庭教育支援のための職員研修の充実

家庭教育支援係が中心になって校内教職員の研修会を開催し、家庭教育支援の在り方や問題点及び解決策を話し合ったり、アンケート結果を基に家庭教育の課題や啓発方法を検討したりする。このことは、個々の家庭への対応や支援についても大変有意義である。

### 5 研究結果と考察

子どもにはくむべき豊かな心とはどのような心か、また、近年、家庭の教育力が低下していると言われている要因や3年間の家庭教育調査結果を分析することにより、学校に求められる家庭教育支援の在り方を考察した。それらから、教職員が一致した体制で家庭教育支援を行うためには、校務分掌に家庭教育支援係を設け、組織的・計画的に支援をしていくことが必要であると考えた。この係を中心に、家庭教育支援を学校経営の一つの柱として組み込み、全教職員が一致した姿勢で取り組むことにより、大きな成果があがるものとする。学年や学級単位で同様の方法で支援に当たるときにも、各学級や各学年の取組の様子を校内研修等で情報交換するように努めることが必要である。

### 6 今後の課題

家庭教育支援係の設置で、校内の家庭教育支援の体制が整うものとする。更に、この係の活動を広げ、他校の家庭教育支援係と様々な親子の活動の情報を共有したり、アンケート結果を交換したりすることにより、より多くの親や子どもに対する充実した支援が可能になる。家庭教育についての支援をより多くの親に対して幅広く行うことが、地域全体の家庭の教育力向上につながるものとする。

#### 参考・引用文献

- |     |           |                      |          |      |
|-----|-----------|----------------------|----------|------|
| (1) | 広田照幸      | 日本のしつけは衰退したか         | 講談社現代新書  | 1999 |
| (2) | 柏木恵子      | 子どもという価値             | 中公新書     | 2001 |
| (3) | 文部省       | 小学校学習指導要領            | 大蔵省印刷局   | 1998 |
| (4) | 奈良県立教育研究所 | 平成12年度家庭教育アンケート調査報告書 | 奈良県教育委員会 | 2001 |
| (5) | 奈良県立教育研究所 | 平成13年度家庭教育アンケート調査報告書 | 奈良県教育委員会 | 2002 |
| (6) | 奈良県立教育研究所 | 平成14年度家庭教育アンケート調査報告書 | 奈良県教育委員会 | 2003 |